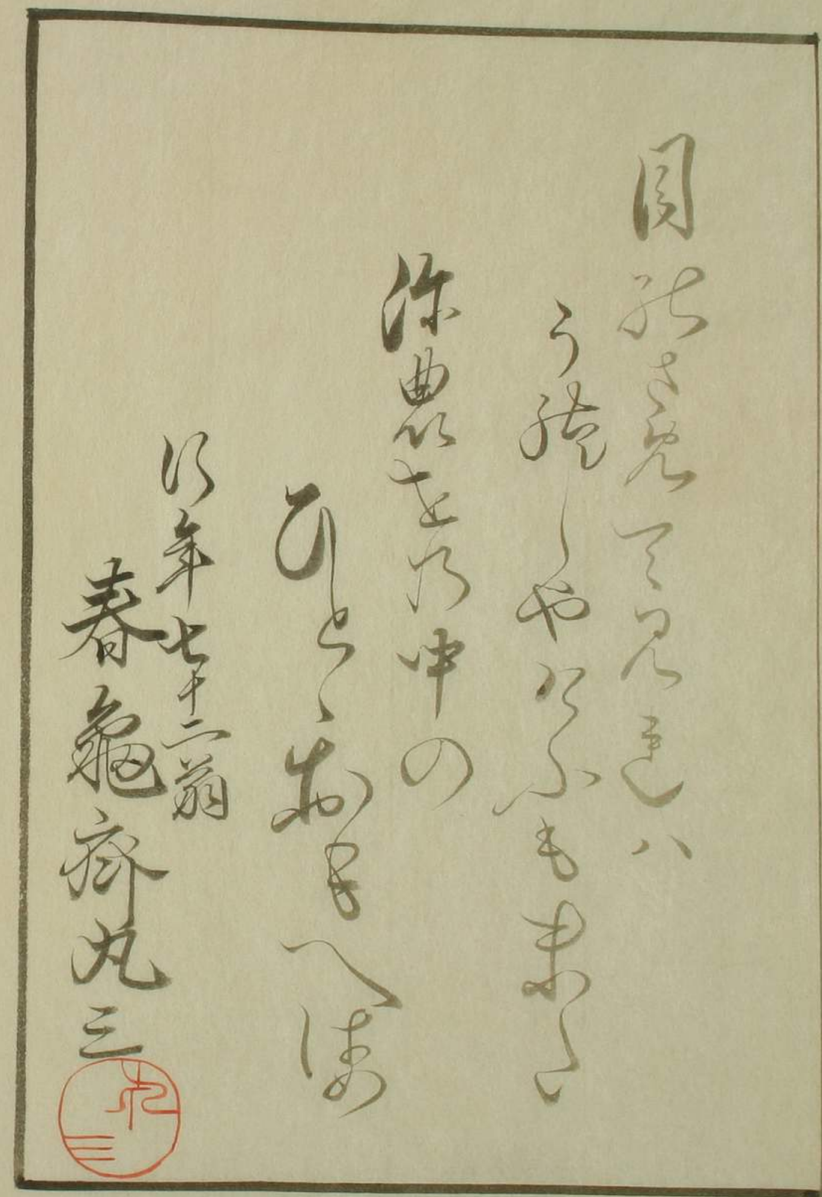
若人のおもうて

坤

チ4
1082
2

特
1082
2

滕豫齋 文麗先生肖像
天明元年辛酉二月五日 忌至
天保二年辛卯 五十年正當也
門人高正和寫 文麗手摸
當天保二年三月五日
名泰都
從五位上伊豫守
加藤氏画法狩野ヲ出
ヲ信ト人
細地下谷池之端
廣尾
光林寺
行年七十七


因ふかさ
うらゝやふもまち
作無文を乃中の
ひとゝ為まへほ
明治廿年七月二日
春亀府丸三

熊本侯家内
肥後益城郡
矢部在田原村ノ産
大空武左衛門
二十五歳
○丈 七尺三寸 ○掌 壹尺
○臂 壹尺七寸五分 重十三貫貳百目
○腰 壹丈五尺壹寸 ○身幅 前九寸 後壹尺
○袖 壹尺九寸五分
○肩行 貳尺貳寸五分
○金子 度量衡ハ 須小さく 兼て下長なり
○熊本侯家ハ 代々堂舞を 江戸に 有り
○大空の號 大阪角兵衛 武蔵屋 贈ル
○年齢の 稱世上の 沒說 苗字ハ 元 母
○父母兄弟共 陪母 の 身の丈 共 壹尺
母のこと 有り
○彼ハ 九 かさ 七 を 月 ふさ 付 考 梨
○生質 淫 条 ま て 小心 豊 ハ いや し 者 ハ 九 し 事 ま し と ふ
右 ハ 本月 廿五日 柳河侯の 藩 部 に 於 て 武 を ん す 面 法 の 義 九 國 の 名 を 示 す 所 の 人
文政十 庚丁 歳 年 夏
解 於 羽 美 人
歌川國安画

文政癸未六月十一日 肥後國熊本産
全 樂堂 墓本
大空武左衛門
三分一 編寫
身長七尺三分 手裏 寸 九分
衣丈 尺 寸 足裏 尺 寸
肩巾 尺 寸 九分 外套 尺 寸
袖覓 尺 九寸 身重 三十二貫

高山正之之像

存彦九郎字仲繩

新田郡綱谷村人也其先遠江守某義貞勤王所謂士騎黨之也

高山正之上野人也存彦九郎家世農正之生而俊異喜讀書略通大義為人白皙精悍眼光射人聲如鐘有奇節母死廬於冢側三年饘粥不給骨立如枯木下略其為世所重而直己不阿如此然正之在東不得意西游至筑後過一關關吏止正之歸館自刺館主人驚問故不答曰吾館子々自刃死無他證左又不知其故吏来檢尸何辭答之願不殊以待正之曰諾剃刃平腹與劇談至夜分吏来秉燭檢之又問故不答固下略

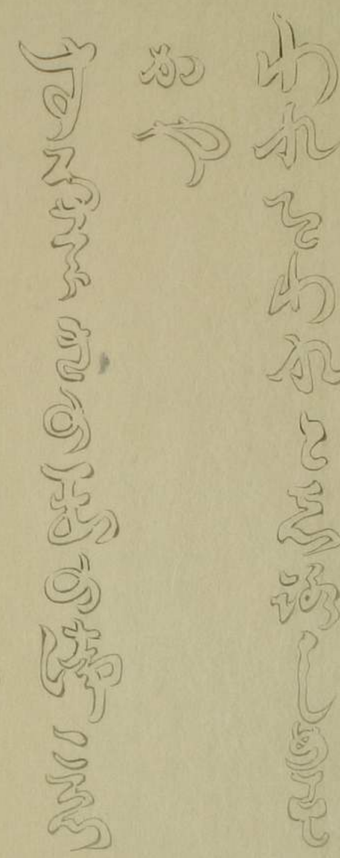
我古山之本雄拜寫

九分一

本紙圖丈七尺寸　十分一縮寫

元圖頭手足不ツリアイ々寫

問曰狂發而已乃握刀深入尺許即死臨死館主問所言正之曰寄語海内
豪傑好在而已正之既死事傳三都（略）
正之竟絶年四十餘是歳寛政五年癸丑夏六月二十有七日也墓在久留米寺
坊遍照院（略）



集正之贈劔持長藏書翰之字　松浦　弘

高山彦九郎

御沙汰書寫

草莽一介之身ヲ以テ勤王之大義ヲ唱ヘ天下ヲ跋渉シ有志之徒ヲ鼓舞ス世ノ罔極ニ遭ヒ自刃シテ死ス其風ヲ聞テ興起スル者不少其氣節深ク御追賞被為在依之里門旌表シ子孫ニ扶持下賜候事

明治二年巳巳十二月

太政官

丸山應挙が狐狸の画をこのみ多く應挙に学び野狐の卧たるを見たまひて
若樂多く彩を百とし常に挙の家に来る應挙樂に勿論狐狸卧するを見る初常云
山中たゞく是を視る挙云作りたまへ是を見早くとれ忘れよ故に久く費たへて集
諸を一月まゝりあるく若樂挙の家にうしろなる竹叢中に狐狸有りて卧て樂是を見て
大に驚家に入て挙に告て挙と共に出て竹叢中に狐狸を見て
仰て酒食をたまへ門人一夜挙を時に失背よりも北野狐を見て竹叢中に卧たり
挙即ち筆を操て是をうつし畢て
工描既にさめて時に挙の家に鶴あり来る挙問て云汝
狐狸の卧たるを見たるか答云山中常に是を見る挙画る所の卧狐を示す
云此画如何答熟視するもやゝ久しく云此画よりとく出へしと狐よりあらず是
病狐有りといふ挙驚て手を点ずるに忽ち飛狐の羣中に脱る毛髪憤起四足
屈情おのづから露ひ僕山中ゆく病狐を見たるとき実に此画のごとし挙動く眺て

翁の所説の形容を問翁説を呈詳あり 去ぬる比と峯先の画を求て更に卧龍
を問ふ 予も翁の口傳よれり 器量あり 人物の老練 其ね峯と知ふ定さりし
狀を云へ 安立寺 玉屋 彼地 狀を佐朝行中ふ死り 峯先を思ふ 孫翁卓
見を感し 蘭雪 応を高れを傳ふ 一向先を絶く 翁文章の峯法を問ふ 所の
画幅を求ひ 見先さ 玉翁 翁の翁 歎して 先生の卧龍と峯 あ知て 去浮く
翁ふ謝を画 先 奇絶 今西京 京師 峯 翁の興 心を 知のまし
嘯風亭 浜 亦西定雅の 絵ふ 應峯 の 望し 附地馬の草を 玉 玉を 問 り 一老翁 ふく 雅て
云 先 言 言し 峯 云 を 画 基 麿の 翁 云 馬の草を ふ ふん と 去るやう ふ ふ 先 を 目を 閑
是 草ふ 目を 傳 ふ を いと 去 ふ し 此 を 叢中ふ 鼠づ を いと 去 ふ ら を 南 眼ふ 傳 ふ 絶て
及 是 言 言 ふ 去 ふ く 何 を や 峯 ふ く を 説 を 感 を 抑 此 二 翁 行 人 で 野 史 る
切 ふ ふ と ハ ふ 抑 を や い ふ 紀 蓑笠雨談巻之二 十二

圓山主水 應舉 京都の人

寛政七年七月十七日 六十三

近世京師の画家多くハ應舉を
祖ふ出さる 堂奥 近世の名 あり
長澤蘆雪 門 り 出て 名 ふ ふ り
呉月溪 始め 無村翁ふ学ぶ 又應舉
を学ふ 豊 景文南岳 諸家ハ
皆呉家 法 り 出 り

應舉

此押文是迹布低得巻物浅草文庫摸

呉春

呉春号月溪 画家 京師人 松村
文化八年 七十才

同臧

蕪陽

加茂真淵像

号岡部屋 遠州濱松産
明和六年 十月三日
行年七十三

明治十四年十月　第二回觀古美術會出品

天生四地生萬物天下有民仁聖
牧之教者道萬物以栄其道萬物長
遂道萬物盈宇宙萬物靜盈天藏藏
宇復起莫知所終莫窮愛始

丙子季夏下院　林子平寫

林子平

仙臺西之町龍雲院

寛政五年六月廿一日
行年　五十一才
六世齋友直之墓
臺石迄戒寺

藝居せしときの歌とて
親もなく妻もなく子もなく板木
金もなく朽ぬれとなほ朽もせず

大槻氏藏

海國兵談序 前文略予友林子平清廉慨之士也性拈澹寡慾存
大義其親族畧多縉紳子平視不爲家酷好跋涉凡 邦域内經歷
殆徧其自處常如在兵革間藍縷糲食草行露宿陶々而自適
云嘗憤然発志困学有年著書滿架皆當世元策此編名海
國兵談其意以為我 國海國也要在備於海寇故以目焉其
論說確實激切如目覩其人傍採海外奇策古今來
未嘗見聞者出之已以觀我 國防禦之大方
其所志可謂偉矣當今之世豫虞匪懈講習之務
益又益精研究周致無所不至則所謂以至萬萬
世使人民永莫受兵革亂離之若者其在乎斯歟
其在乎斯歟

天明丙午夏五月念六

仙臺 工藤球卿 撰

寛政四年壬子五月十六日 旧幕中藏

松平陸奥守家来

林子平

子平方藏從令利欲不顧臣之名聞扨り死罪の無之
風聞又八推察之不日有之可有し如斯歟
說等丸文著述被且右之角忠八御取寄等に依る浪人の
地理未遠し餘分の添出の文に板行の被仰付の時
居宅し居未不聞に成仕方不届に付き先お暇引渡
主所に於て熟考仕板行物差扣来る
右松平越中守依指図断書小田切土佐守殿中藏

天保十二年辛丑七月二日大書院泉田作淡守ヲ座ニ通ス中流
林子平儒先年勢州中村ニ而文政五年二月御潔任
御免仕ル御赦ニ御免被仰付然而病気ニ付年来
中流ニ罷有所年来ハ肩入ニ般水野越前守殿
ニ而遠国流ニ付至人方ニ赦免中流ニ罷有ニ付
此系別段作法事ニ御達ス

死天子年再勅

承人　林良位

此位の赦ハ家齊大改元御慶節一位叡慮ニ付大赦ニ而ハ
無之

師朱子曰
やまとだましひ
人ハ
あさ日さす
やまとこころ
宣長翁
賀茂真淵書

以下　此印文鳥獣

本居宣長 七十二

享和元年九月晦日
山室妙樂寺櫻樹下墓アリ

紀州飯尾醇庵松阪產小津氏
本居健蔵又宗春と稱ス
本居宣長之奥墓とあり

伊勢の山より学び鈴屋の業をつ
ぎ古今を和哥より和哥
をしかの蹄に倒よ
まこと人間の事業
歌は千百年の後人
和哥山御陵の花
更医の列にかくらる

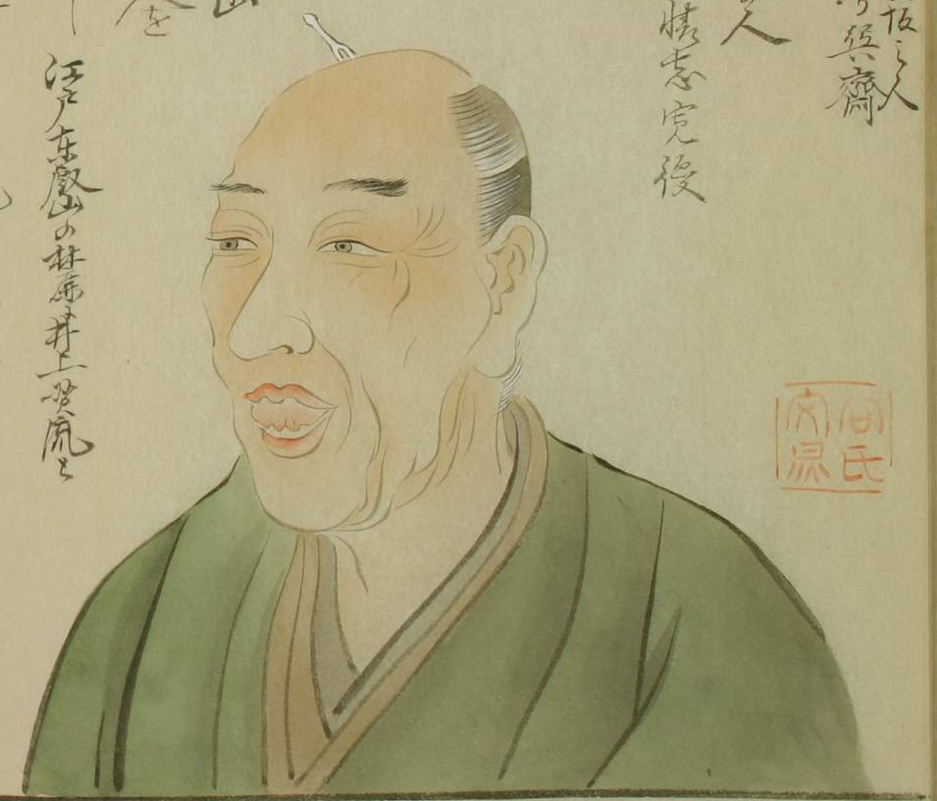
宣長

己巳春日よりけしきをえらぬ紀伊の
くにまであそびあるのこけしに
七十二軒付熱田山室に墓球て
山もりよりあ平は墓のやとーめ風ふきちらす
桜花ちりてかをんぐ

大視文化

安州山之目ノ人

木村孝吉郎 号世粛堂 大坂の人 号呉齋
享和二年 正月廿音 六十七
名孔恭 字世肅 浪華橋江の人
俊逸ふかく忠誠且恬淡多通し情志完後
世人ふかく交を結ばざるものなく
ひとふかく和漢の物産を究め山海
の名産奇異を集め
傍古出画を愛玩し自ら
亦よく山水を画たり 方今唐山
様の風流絵事をもて称ふる此人を
もて嚆矢とす皇朝の学ふ精し 江戸安慶の林原井上芳流と
いふ人あり容貌甚奇なり その隣人ひとりて芳流の肖像を画らしめあり



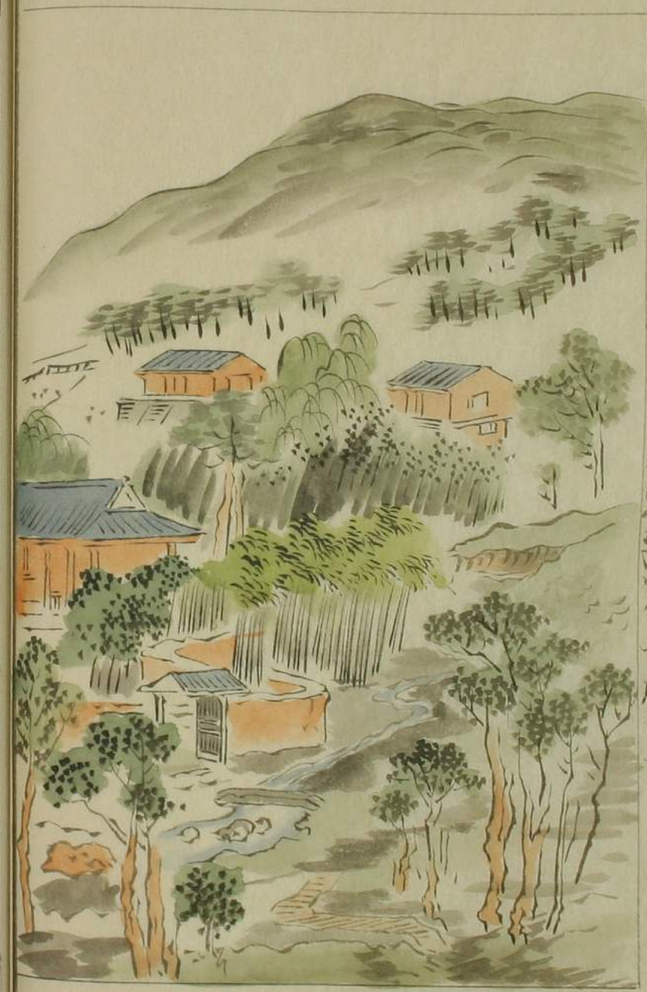
何氏家藏

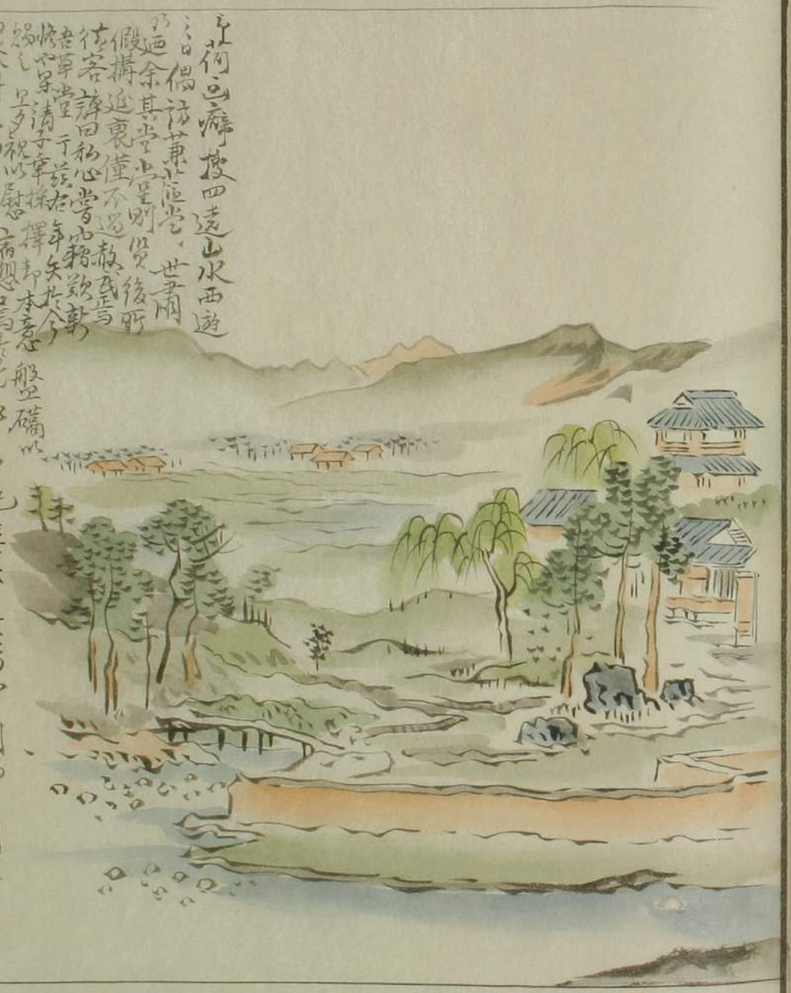
海景山水

呉齋

菉葭堂案卷

菉葭堂國門前臨流水入門斜斜樹蔭經數步為書堂
堂前後雜植異花名門以諸國怪石軒砌指抑垂陰書房一區
上設小閣房後有二庫分收本邦外國書典有藥欄有臨雨亭果園
有魯清隣村樵播皆可經行遠山入窓日一二の眺望云





亡何西癖投四遠山水西遊
之日偶訪菉葭堂世世用
遊余其堂堂則覺後所
假構近裏僅不過數畝爲
往客謂曰初心勞心務欲動
者靜堂于茲於年矣此今
修也乎清子幸株擇却本意般殷
勤之多之祝以慰吉想見焉於乎
霞八月寫於浪華菉葭堂中

文晁

菉葭堂中記雜其旨於指掌間聊爾寒語耳

皆川文蔵 淇園

京師の人 享保甲寅生 月八日 文化丁卯 月十六日 没

名原字伯恭 又号節斎と 享年七十四 京極西洞院に葬

晩年画を大に進め

四五歳の頃より 文字を識り 書をよくし画も一掃するのみ

又詩を北甫の筆八首の詩を出て

あるべしたりしに日暮らす 読書

十四歳の時 学問 家を出ふ 本願の

師家を遊ぶ 席上唱和の詩

巧なりしかば 師人を驚らし 名を海外に馳せり

文化七年の歳 西藤堂を建 弘庵と号 春秋二伸 先聖を祀り

其門人凡三千餘人 性温和 詩を嗜み 絵画の翰墨を

名家畫傳中抄出

太田蜀山人 四方赤良南畝蜀山人 江戸ノ人 文化之年 六十二才 寿像

文政五年 尚氏寿泉

太田南畝 号蜀山人 称名覃字子耜 通人

文政六年四月九日 直次郎

行年七十五

酔生夢死

夢の浮世七十五年

諸書得方脯近盤餐比目魚

蜀山

深井志道軒

名 榮山 号 一无堂又伽藍堂

明和元年三月晦日 年八十二 没又
七日 金龍地界金剛院葬

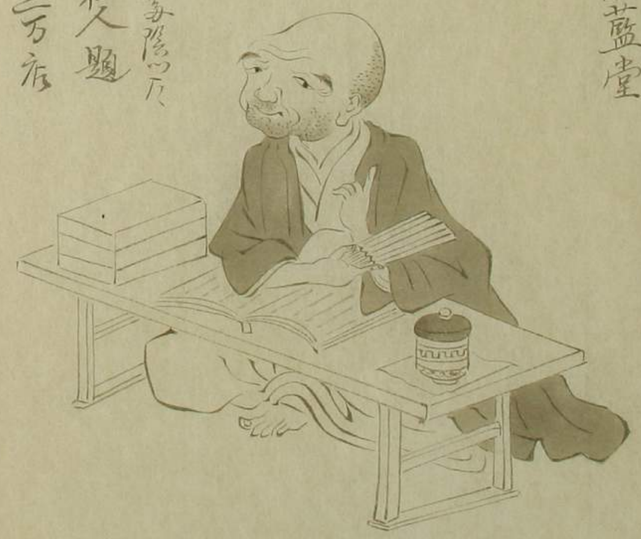
遠き人きたつさ小ぜ子ゑ賞来
ゆくも過るそ〜月

虚中実
実中虚

ゑんのたのらく〜ちらすあめ
なこりおしまぬ涙の雫
をろ白の海 志乃舟

榮山出 昔仙人題

身纏三衣忘無一物日取十二銅 是偽三万石



嵩之指

本姓佐脇名道賢
字子安
別名嵩指又英一水景夕
觀中岳堂号東窓翁
一説本姓高木号法
通称玄蕃明和九年
十月廿三日三十五歳浅草
松谷寺本稜墓碑葬
一説晩年門人ナリ

佐脇嵩之像

栗山

何氏文景

栗野茂助 号栗山
文化四年十二月日 年二 卒 葬千丈塚
名邦茂字茂輔一号古愚

御厩畠

岸雅樂助岸駒

京師住寛政十庚申年
四十七才位寺院像
奉命

當卯七十八才　九十才
天保九年
十二月五日没

山東京傳

通稱京屋傳藏と云ふ京橋銀座一丁目に住して煙管煙草入家製と繪書九其餘製業を兼ねて業とす初め北尾政美に學ぶ寛政改元と名のり又狂歌に名を
[illegible]
[illegible]
[illegible]

文化十四年丁丑春二月

京山磐瀨書 光 篆額

愚弟

同碑背面

翁諱 醒字酉星號 醒齋又號山東庵称傳藏以其所居
近京橋一字京傳故其為京傳最著磐瀨氏其先出自
磐瀨朝臣人上近世資詮者仕太田道灌為謀臣道灌亡
世隱於勢州 一志祖信篤考父信明仕某侯多病辞仕隱
於東都市娶大森氏生翁及百樹翁少好稗史小說數百
著作□富戲文幼說謬悠無根能令人悲能令人喜坊間
書賈進於剞劂者利市三倍於是兒童走卒莫不知
京傳者晚悔少作無益於世改勵刻苦搜索奇聞著近

世奇跡考及骨董集二百年未奇談逸事考據精確
可以補小史矣文化十三年 丙子九月七日沒歲五十六葬國豐山
田向院第百樹埋翁幼時寫字案於淺草寺中板本
祠側以遺戢建碑刻翁國字記言以告後之讀其書而不
知其人者爾

文化十四丁丑春二月

江戸南畝覃撰

京山磐瀨百樹再書

窪世祥鐫

田向院中墓誌

亡兄諱 醒字酉星一字京傳号 醒齋号山東庵磐瀨氏
其先出自磐瀨朝臣人上近世資詮者仕太田道灌為謀臣

道灌七世隱於勢州一志祖父信篤父信明仕某侯多病
辭仕隱於東都市娶大森氏生二男二女亡兄為其長自
幼好文十歲編寫孟子今尚存家自十九始有稗史之作
上梓者百五十余編因茲其名聞海内王公妾婦牛童馬
走無不知矣今茲文化十三年丙子九月七旨病没歲卒六
矣予弱冠出仕篠山藩病辭仕絆与亡兄同筆研有年
無常風来玉樹碎痴心月照蕭蕭逝鳴呼悲哉

京山磐瀨百樹謹撰并書

愚弟　　窪世祥鑊

岩瀨百樹字鈗梅号京山岩瀨朝臣人上之遠裔也
父信明勢州一志之地士来江戸娶大森氏生京傳翁
百樹及二女百樹自幼嗜文武弱出仕　笹山侍從多病
辭仕以及鍼革之技為業自戲有稗史之作乞禄者
隨至編作日富与兄齋時鳴雖然少作之名為丈方
所耻也時三十三已過上壽之半故建壽藏自記長聊
省亡後之勞尒

京山岩瀨百樹誕辰之醉後撰并書

于時文政五年壬午夏六月十有五日也

墨水石匠　窪世祥鑊

寛政二年庚戌秋八月

岩瀬氏之墓

岩瀬傳左衛門信明

男　傳藏有濟　建

著作目

骨董集　式清画　四　　近世奇跡考　上同　五

四季交加　二　　忠臣水滸傳　十

善惡鴛鴦方忠義傳　六　　昔語稲妻表紙　五

腹筋逢夢石　初二三　　近夢者餘興　小型敷写忠臣蔵　一　　本朝酔菩提　十

教訓繪兄弟　一　　小指面草　一　　小新追圖彙　一

一黄表紙　百十七部一合巻　八拾九部　茶表紙本　芍薬本　許　十六種　自画多　百多

山東京傳

山東庵　菊花事号アリ　法号　雅号　智海京傳

嵜瀬氏初名田藏本姓拜田

称京屋傳藏又号

醒々齋ムサビノ翁

字西星号醒世老人

画名北尾政演

江戸京橋住

文化十三子年九月七日

本所迴向院　五十六

附録

名藏字伯度

江戸深川木場ノ産

初名甚太郎

志たま尾ハ柳ハ似ても若葉の

風ハあつさの毛いろかな

京傳画賛

紀寄ル　雞の画ニ

文化十一年九月

巢鴨忠兵衛造菊談

秋ぞ知る三ツ〻菊の作花園

香蝶楼

国貞画

国貞

活東子ハイレハピロ
似まならへりされと
をらしき新人
イニロ匂
煙りとそもふ

十返舍一九
重田貞一

十返舍一九重田氏名貞一通称與七とふ後河の産にして産物屋又泉川佐賀所なる故に竟に通油所書肆仙窟堂裏山後住せり　墨川亭旦九幼き時方丸と呼ふ故に市丸と云ふ雅名を弱冠改名徳地に住して七種流の香道を深く会得あり十返舍の号黄熟香の十返をとりて称するものなり
浅草の地業手柳若竹笛好と復に木下蓮の縁戯曲を編述すること多し後年あり自ら香炉を拵へ蓮を挿み庚改六第平復し東都に帰り浅草に新宅を築造して耕余夢を梓に上せて世業せり　文化十甲戌年歿年七十歳
著述目
道中膝栗毛　自画
同後篇中仏道　同
遠々白浪　北斎画
人々癖十癖緒言　一
嬉遊笑覧　豊国画
播磨　舞子浦　豊国画
貴色　安本冊　一
一黄表紙　自画多　百五拾八冊一合巻
内文言修行金仙鞋廿五編　百六拾二冊

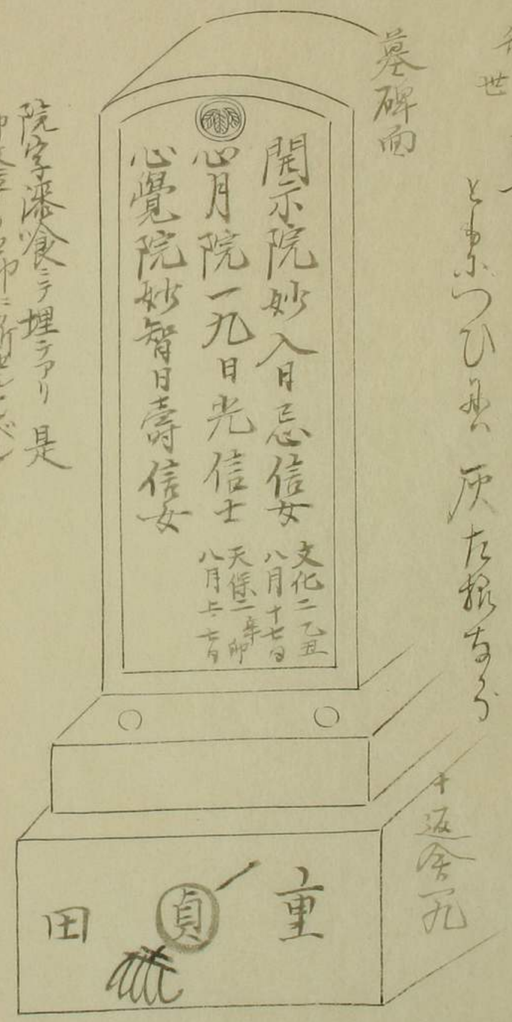
天保二年卯年病で没す　法名玄當居

善龍寺　俗ぬけ寺と云　池中の東陽院に葬る墓碑想建長八十六ヶ月を東三彩月

辞世

世に咲て　とまつひ　ぬ　庚　たれ　ぬ　ら

墓碑面



院号深浅ニテ埋テアリ　是御改革の節ニ斯セシナベシ

鶴齋杉田先生肖像

名ハ翼字ハ子鳳俗稱ハ玄白一ニ九幸ト號ス　父ハ甫仙ト云若州侯ノ醫員

晩年ニ及ンテ台府ニ拜謁ヲ許サレ八十五歳ニシテ舘ヲ捐テ給フ

蘭學事始八十三齡九幸翁漫畫ストアリ

蘭學事始抄摸

玄玄居士墨傳

宮 吉吉 述

先人竹内玄玄一名孫陽高麗にして病ぐ
ゆえ失ふ所なり　因て加賀に赴き人の徘徊へ導らんと
扨よ来れて八軒ら来しぐ　玄身重苦色を見るの何
たハぐ何を思ふとも　甲殺たらうんと答へし　我たふ思
ひて　尚書いたるや　唯心と病を心眼の所ちうんとお
法ちふ考おつまする　所面しそ　心よて見るがゆる
なり　月の色と喻はまて　勾に感激ちんのり　異ものす
深く風よ　驚くと紙附こ至　法ちう千里色一歩より　起
ちといへはん掛たらんよ　原ど玉徒変おいくらけて　めぐ
玉に玉つまひく　初屋やあれ　梢に成り　枯ちまを
一自我吐しまり　祈らく　小数多の紙仏事を費ヒ是れのる

新水亭麿と交遊して　近代対論するまと　他なる一芸
都里を形く　法玉義　経歴する　志ひり　習に亡て　桜泉の
学ふ俳徊　家を　十仟年　まく　武の江戸　事を深閑
小居を卜ぶ

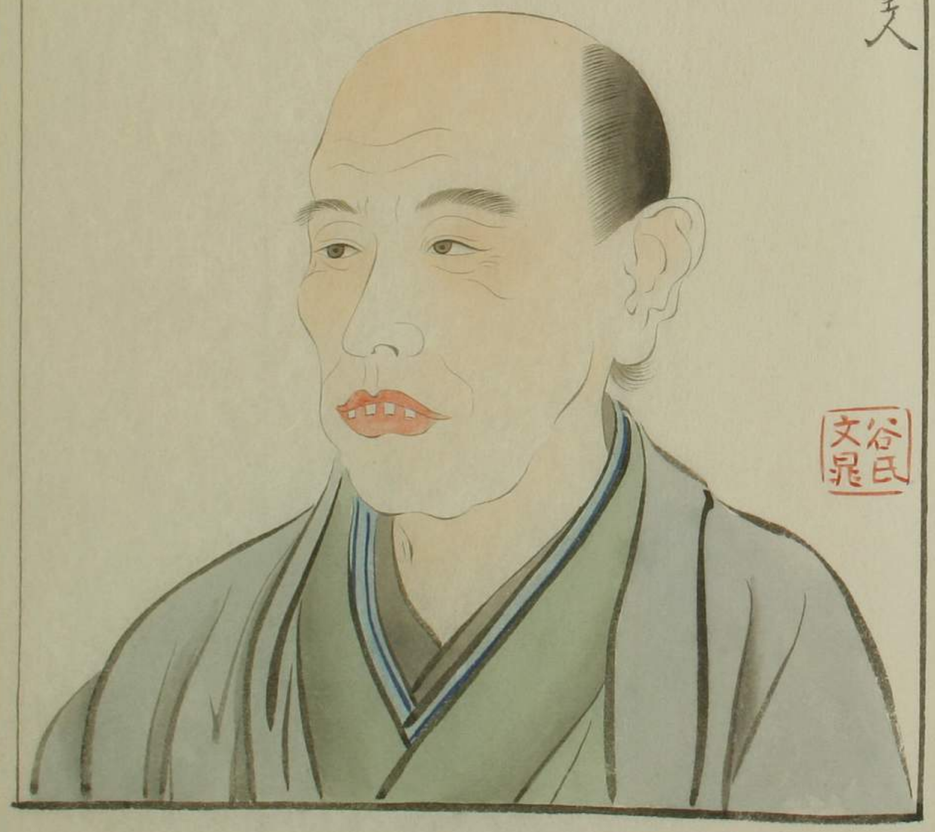
安東院玄玄居士

学年花や
十海名ば
又の
名ぶけ

又玉姓十郎兵衛ハ学んで成就す有よ 儒子を蓄ふ富を遂て信濃
国諏訪ゝ元禄年間家業を捨て 和漢の儒道研究し武蔵
国江戸へ来てより人の困窮救
ハ概ね多ハ赤貧洗ふが如く 其金限を借く貸与人ハ資用ハ拾ふ
有隣を捨て不足補ふハ天の道なりと 玉姓渡世
ハ此恩ハ文化改元ハ年中秋北五百枚 物価
享年六十有二 若年長久院ハ尊厚

京師吉梅園主人

松井山岩翁



樊學頌

文化八辛未年四月壽像

典江画家大坂人

文政元戊寅年四月十三日
七十四歳ニシテ 物故ス

浅草 源空寺

十七年一月葬

伊能忠敬生前像

諱忠敬字子齊伊能氏号貞東
称三郎右衛門晩年勘解由北総
香取郡佐原村人原姓
神保氏、
五十歳ニ及シテ家ヲ其子
譲レリ
寛政十二年閏四月
官命君測量北陸道
及蝦夷地方東南沿
海享和元年二月又
伊豆、相模常陸陸奥
二月 出羽、三越、佐渡、
能登、駿河、遠江、三河
尾張沿海
文化紀元集地方各圖
扁一大圖一進呈其九月賞賞
賜廩米、擢為小普請組厲天文方
當時ハ私資ヲ以テ測量セシコトヲ請ヒ方メテ其允許ヲ得タリトニフ既而又命測量山陽山陰西海南海四道壱岐對馬
二島官道沿海十二年又命測量伊豆七島及箱根湖既端軍測量江都府内十四年四月府内國成進呈 下略

先生曾孫源六所藏

故豐國門

歌川國芳

号一勇齋又朝櫻樓
浅草日蓮宗大仙寺葬

文久元年三月四日
深修院法山信士
行年六十五才

やさ草の
ときえて
筆洗の
水も魚と
なるなつ
梅巴

門人

歌川芳房

号一寶齋

万延元年六月十日
釈蓮入信
行年三十四才

秋孝

寵田鵬齋

文政九年三月九日
七十三

這老子其頭則倭其眼則倭
称為何人称為誰氏仔細看来
鵬齋便是非商非工非農非
士非道非佛非儒類一生飲
酒終身不仕寢耶黙耶自
視迂矣

壬申歳四月六十一弧辰自題

関東 龜田興

文化九年一月十日
文飛寫真門

越後亀田所佐々木新平蔵

文化年間

越後国小浦原郡十二村曽我左京次

江戸に遊学し鵬齋の門に高足と

なる因人曾て師の像を絵ふ冒頭に

写さしめ為師佐ふく画題を得

たり

磐水大槻先生

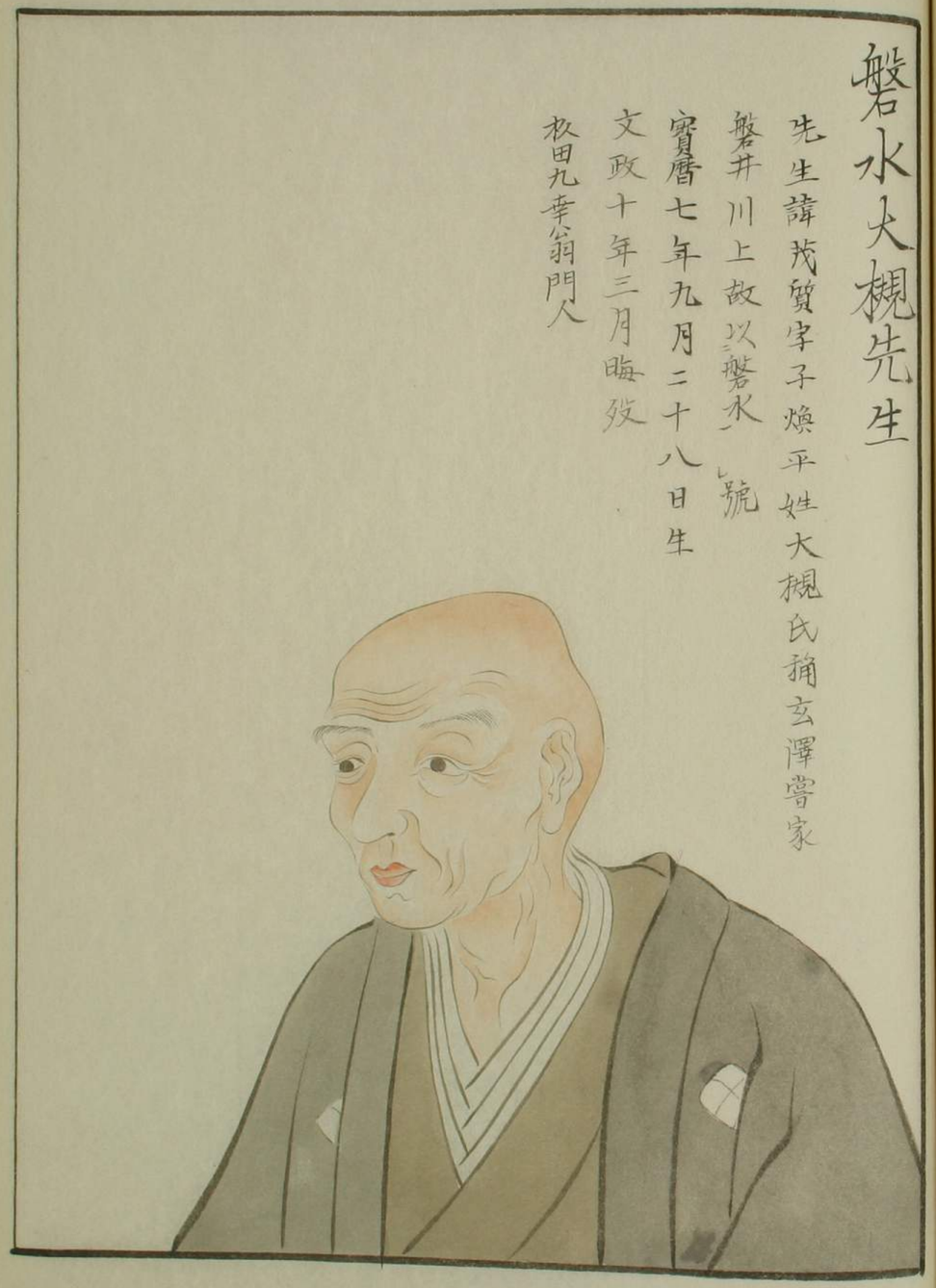
先生諱茂質字子煥平姓大槻氏稱玄澤嘗家

磐井川上故以磐水號

寶暦七年九月二十八日生

文政十年三月晦歿

牧田九章翁門人

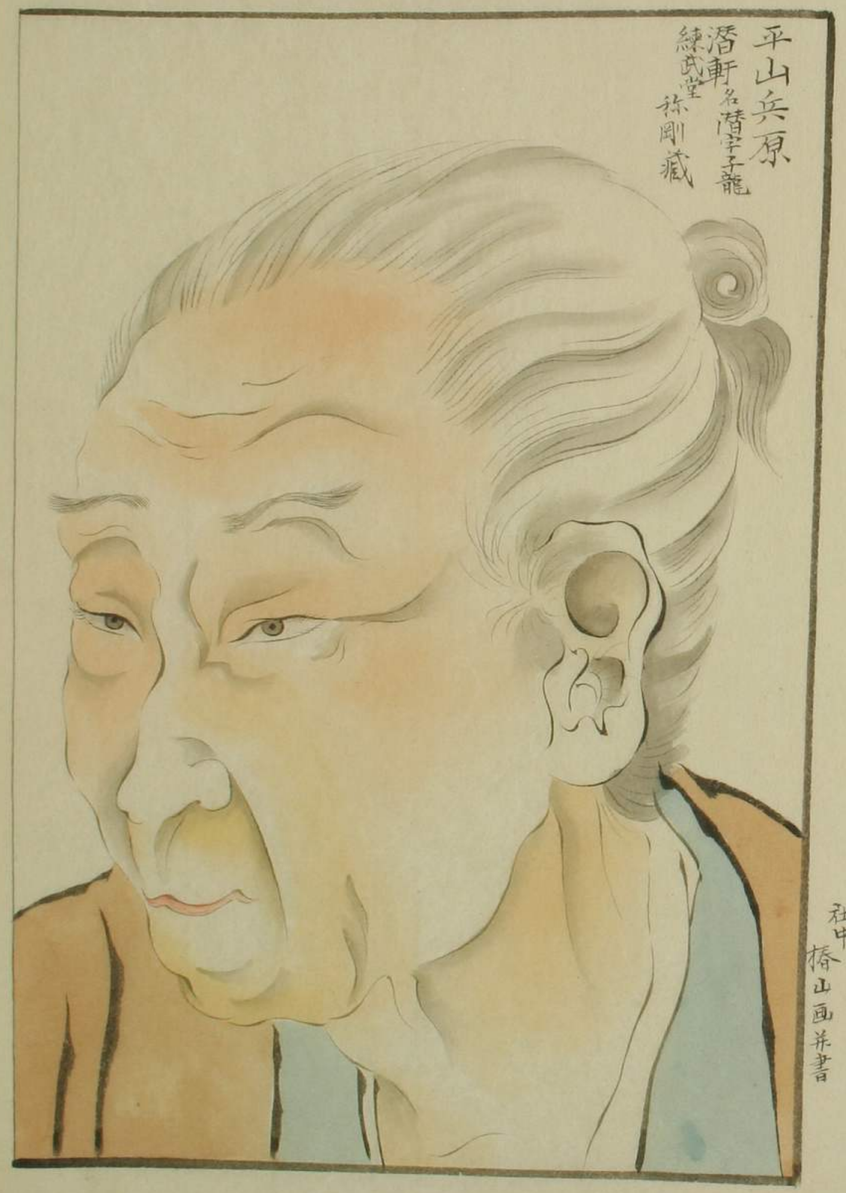


[illegible]

[illegible]

[illegible]

武田耕雲齋
三十九歲肖像


平山兵原
潛軒名潛字子龍
練武堂
孫剛藏
社中
椿山画并書

夫講究韜畧演習武技者其實在國敵
國恩萬分之一矣若不出群翰略雄精乎武技而
而不爲鷄鶩能言木偶戲技者乎希矣識者之必
滑稽之自量命世稽報國極如雖免狂妄迂誕之譏也
象激昂孝便之得進實用業者之道也捨生取國之至誠
任其責矣是之所以增出洗流涵濡之事也
譚兵藝者爲武士律戰期之殺兒如仁
社名報國累代笑背刺盡忠我做擊劍望其末學製槍術種雀雷精神

卒山行藏 大東洋平子翁六十四歲壽像 文化四年

菅多仲　眉師号茶山　備後神辺の人

山崎櫻齋

内藤椒岳画の肖像
寫真絶妙

大御番普請寄二百俵

椒岳姓八橋名八春秀
世稱平三郎性
昏を嗜む磊
落不羈奇
才子酒り外
貌篤行の君子
えんく寡言を
酒を嗜み美食
を好む指戰小
名伐馳るも八
世を欺く所ん
山の子天関を稱ぜれ
人口多し
春天金三國志
の人物を見るとし
ものの小採高を勇標
比さ一いむべし
筆才ありて書風一家を
為し又俳諧を善し
江戸座九

佐藤一齋
二十一歳像

安政六年九月薨
佐藤捨太郎八十八

抱一 等覚院屠龍
酒井氏
文政十子年十月廿九日
二十八

抱一拜写像自画

田中抱一藏

藤東湖
三十三歳肖像

豐廣高茅
歌川廣重
号立齋

安政五年九月六日行年七十二

元祖豐改歌代
歌川豐春号一龍斎
歌川豐國一二代豐國
歌川豐廣
歌川廣重
歌川國芳

東遊策杖の子〻く旅の秋
雲の外山は名をとゝめて見る

廣重

豊國画

豊國門人 二世

歌川豊國

初代國貞

号五渡亭 一雄齋
香螺樓 一陽齋
琴雷舎 桃樹園
本所亀戸住

元治元子年十二月十日
行年七十九
亀戸光明寺葬
豊國院貞匠画像信士

命名の如き子
おろかなる別れかな　歌川豊国

門人國周画

葛飾北齋

門人 吉良臣小林平八郎孫也

文化十四年十月五日尾張名古屋西掛所に於て半身達磨画く百二十畳敷又文化元年四月二日青羽護国寺庭前画中風を病む時妙薬ふく治するゆえを伴へらふく　大ハ円新すり

こまつふきざみ酒を合入七ん〜ぢ　永信独ふつめ多ねをとり

捨ゆふく　各　世間ものしらぬ　治すること

土鍋ふく　考る　ゑ　ゑかんけを　忘　六十七歳に治す　文政年間

尾州名古屋本町通の間数　間口　奥行　石ふ九尺

地ふ　おゆく　老　有　百畳敷　口七尺　みゝ一丈二尺

文化十五年　たゝ一百二十畳敷達摩大師　面　三丈二尺

十月五日大画　の尊像を画く　華束侍五こう

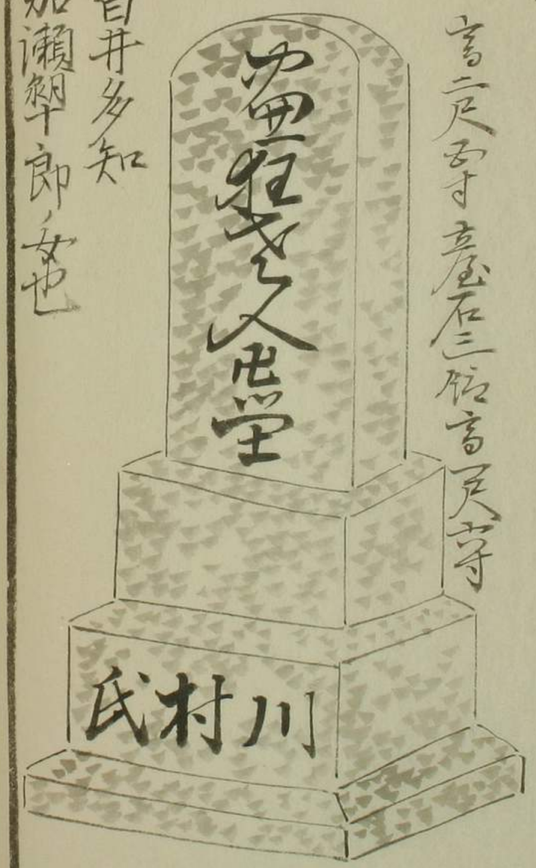
庵上　東郷旅宿

北齋翁七十五日　南日面天王六月あり　西ろ　ろき　所ろき

口口

左側ニ
南総院音誉北齋信士　嘉永二年四月六日
姓善院法屋妙授　信女　文政十一年六月五日
通運妙心信女　文政四年十一月十三日

信濃ノ国
天保二年の比
八の字のふんたり
強く　家の石
沙婆ハ位階なき諸
つるきれて芝ふさつも
あしと思へ
相堂金五百疋



言二疋寄　高石三位言疋寺

白井多知
加瀬翁十郎ノ女也

御祝儀申上ます　人物ニ
多くは方ゝから
彩るへ　エヘヒヒ
ヤヨウナラバイク

目ハ

下まふで　ふしてる　ほり
可ルか　磯人　虎山の
先きまでまぶちを付
ハ真平ハ用捨
可ルか

此ハ　ほり
可ルか

此ハ　ほり
可ルか

此ハ風流ハ
をつれの方ハ
ハどうぞ
ハ　ハ
ハ　ハ

第陸
彫代の高石を切り　ハ稼ぎる
義ハ老へ　ハて　ハ
高座く　ハ　上の　ハ
キハリと　仕度ハ　モシ
先の高　老人を　ハ
成ハと　高ハ　ハの
中林　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ

言肆高山彦の書百人一首の画を依頼せし時
翁仮に筵并に下絵認めて送りこれを原本の如く元翁
自画の像をもて改め寛ひたるハ布蒲団なるべし
前北齋親父
此蕐を
法帝こく
筵葉と
老の秋感れ
書肆の
達磨

葛飾北齋藤原氏 為一 称三浦屋二三郎
中嶋氏又葛飾氏又川村氏 浦賀子カ中嶋三郎助妻
幼名時太郎後鉄蔵鉄三 父ハ翁門ニ入リ
勝川春章門ニ入リ
画名勝川春朗
雷震又雷斗辰齋
辰政画狂人卍翁
卍老人画作時太郎可候
宝暦十年九月本所割下水生 男小人目付加瀬崎十郎
赤丞一年四月十日没九十 父ハ徳川家用達鏡師養父
浅草六軒寺町誓教寺葬 中嶋伊勢女於宋應為ト号 女画ヲよくす
南総院奇峯北齋信士 辞世冰を砕くゆくすきんゝやあのそら

二十七年二月寿

羣畫仰君宗
此圖儀表面
愧我三生人今
日重於見
右題
文鼎先生尊照
劉傳原

清人贊

凡雅三世統
佐々木文山
加藤文麗
谷文晁

永錢世近化於々世太留古狸尾崎奈美世曽
山乃波乃月
自詠

谷文晁 初号文女郎 号寓山樓 學齋 本立院生 蒼洲 文晁 雅士 字文晁 文鼎 天保十年十二月曽 行年七十八 淺草源空寺 宝暦十三年九月九日生 下谷三長町住

自画省像

此像日年清朝渡 漬讃除筆
其後返幅

谷文晁 享和年間四十七位寿像

頼弥太郎 藝州儒官　文化八辛未 六年歳壽像

渡邊華山 登

全集堂 天保十二年十月十日 四十九

華山人

渡邊華山翁像

明治廿四年三月摹

渡邊小華翁

豊岩子

成島柳北

稱初名甲子太郎

諱弘 字保民 別号鳳鳴 通稱

奉仕幕府履仕侍講兼

實記編纂長歩兵頭並

騎兵頭外國奉行會計

副總裁敎授五位下任大隅守

明治維新之際辭職歸田

明治七年爲朝野新聞

社長專以國利民福

爲己任 君以天保八年二月十六日

生於淺草邸以明治十七年

十一月三十日 歿於墨水宅

享年四十八

文靖院柳北日詠居士

押上村本法寺に葬 十二月三日

明治廿四年 秋日文紹

七千又六

原